

熊本日日新聞

わたしを語る

百花百草 みな我が師

東海大農学部教授 田中 孝幸

平成 29 年 5 月 13 日～6 月 16 日

- | | |
|---------------------|---------------------|
| (1) 園芸の奥深さに好奇心 | (18) ドイツの友人と共同出版の夢 |
| (2) 宮崎の山や川が遊び場 | (19) 肥後菊花壇作りに学生と励む |
| (3) 好奇心は母方の祖父譲り | (20) 深刻な後継者不足を懸念 |
| (4) 中 2 の修学旅行を機に勉強 | (21) 肥後アサガオの栽培は“断念” |
| (5) 学生運動のさなか九州大入学 | (22) 肥後六花のビデオ制作に協力 |
| (6) 初めての海外は新婚旅行 | (23) タイ山岳民族に農業を指導 |
| (7) 農学者・大蔵永常に影響受ける | (24) 欧州の園芸事情を視察 |
| (8) 憧れのパプアニューギニアへ | (25) オランダ農業の技術力に驚き |
| (9) 開設間もない農学部に赴任 | (26) 国際ツバキ協会の理事に |
| (10) 研究変更で肥後六花との縁 | (27) 三角の「花のがっこう」に協力 |
| (11) 新品種契機に「さざんか祭」も | (28) 子どもたちに昔の暮らし体験 |
| (12) 客員教授で念願の米国留学 | (29) 「モニター農家」から刺激 |
| (13) 新品種についた妻の名前 | (30) 「園芸と文化」念願の出版 |
| (14) 有機農業の大切さを痛感 | (31) 伝統園芸研究会を立ち上げ |
| (15) 戸田義宏先生の思い受け継ぐ | (32) 教え子たちの活躍が喜び |
| (16) 「世界の肥後ツバキ」を誇りに | (33) 心強い学生の「援農活動」 |
| (17) 技術考案の先人に感心 | (34) 研究の道に終わりなし |

(1) 園芸の奥深さに好奇心

私は東海大農学部勤務し、野菜や花を研究する蔬菜花卉[そさいかき]園芸学が専門である。1951(昭和26)年に宮崎県延岡市生まれ、九州大で学んだ後、九州東海大農学部(当時)創設2年後の82年に採用された。以来35年、熊本での生活が一番長くなった。

熊本はトマト、メロン、スイカ、トルコギキョウ、カスミソウなど園芸作物の生産は全国でもトップクラスの農業県である。他の大学では農学部であっても農家と接する機会が乏しいまま研究をしているケースも少なくない。それに対して東海大では、地元で就農した卒業生や大学が設けたモニター農家制度を通じて農家と深いつながりが持てるのが大きなメリットといえ、研究環境としては申し分ない。



研究室で学生に囲まれて(左から3人目)。私の右隣は最初の教

え子で東海大教授になった木之内均君＝東海大熊本校舎

大学以外では、国際ツバキ協会理事、園芸学会九州支部長、緑化ボランティア「グリーンヘルパーの会」顧問など社会的活動にも関わってきた。なかでも、ツバキを先駆けに徳川将軍家から庶民まで熱中するブームが起きなど、江戸時代に高度に発達した日本の伝統的な園芸に好奇心をかき立てられた。熊本にはその象徴的な存在・肥後六花があったことが大きい。

もともと園芸には文化としての側面があるが、江戸時代には武士に奨励したことで「平和のための園芸」の面もあった。知れば知るほど奥が深い、その世界を多くの人に知ってもらおうと、2013年には伝統園芸研究会を立ち上げ国内外の研究者、愛好家らと情報交換に努めている。「品種論」「園芸と文化」「日本の花卉園芸 光と影」「花の品種改良の日本史」なども執筆した。

熊本で長年、教育・研究に携わったことで、私の視野は広がり、たくさんの教え子たちとも出会った。家族の歴史にとっても熊本は欠かせない。妻の三恵子は熊本消費者協会の立ち上げから関わり、多くの皆さんと活動を共にしてきた。2人の娘、美穂と有香は熊本で大きくなった。私にとって熊本は故郷となった。

そんな大切な熊本を昨年4月、地震が襲い、教育と研究の拠点としてきた阿蘇校舎が大きな被害を受けたのは残念だった。熊本校舎で学生たちと新たな生活を始めた中、この3月に65歳の定年を迎えた。4月からも教授(特任)として勤めているが、節目に合わせて、これまでの歩みを振り返ってみたい。(担当 野口和紀)

(2) 宮崎の山や川が遊び場

戦後間もない子供の頃、私の家は国鉄延岡駅前で商売をしていた。家族は祖父母、父母、弟2人、妹1人の4人きょうだい。家ではかわいがられ、また長男としての義務と責任を課せられて育った。家長制が強く残っていた時代だった。

延岡の中心地にも児童公園はなく、未舗装の道路や空き地、あるいは近くの山で遊んだ。私はこま、ラムネ(ビー玉)、パッチン(メンコ)、戦争ごっこなどで毎日を真剣に遊んでいた。

夏休みは、宮崎平野の国富町岩知野にある父・宏幸の実家・富永家で過ごした。大学に入ったころ、富永家に伝わる家系図の書かれた巻物を、父に言われて調べたことがあった。藤原家の銅鏡と共に保存されており、曾祖父まで記録してあった家系図が正しいものであれば私が鎌足から数えて53代目に当たる。



小学校低学年のころ、弟・克佳(中央)、いとこの孝雄

(左)と＝父の実家のある宮崎県国富町で

富永家は江戸時代に京都から宮崎に移ってきたという。私の子ども時分は田畑に囲まれた十数戸の集落で、近くに店もなく、自給自足の生活に近かった。米作を中心に養蚕や競馬用の馬、牛、羊、犬、猫、鶏も飼っていて、当時の典型的な農家であった。家畜のための牧草地が大淀川に沿って広がっており、水田に混じって桑畑があった。蚕はその頃、どこの農家でも飼っており、季節になると広い板の間に天井まで蚕棚を設置していた。

同じ年のいとこの孝雄と仲良く遊んだ。川や用水路で泳ぐ時、街から来た私は水泳パンツだが、他の子はふりちんだった。釣りに行くのも単なる遊びではなく、タンパク源確保のためであった。釣竿は切り出しナイフの「肥後守」を使って竹を切り、あぶって油を抜いて作った。餌はミミズを集めたものであった。わらを切って馬の餌にしたり、五右衛門風呂を沸かししたりするのは男の子の仕事であった。

小学校低学年でも、いとこと私は男なので母屋で、女の子は母親や祖母とともに離れで食事をするような封建的な地域、時代であった。中学2年生まで夏休みの宿題をしたことがなく、夏休み明けの授業ではトンチンカンな答えをして笑われたものであった。

そんな私に、中学2年生のとき父が顕微鏡を買ってきた。最初に作った標本(プレパラート)がツバキの葉の切片であった。結構楽しく、顕微鏡に見入った。顕微鏡を用いたツバキの研究は今でも続けている。

(3) 好奇心は母方の祖父譲り

私に大きな影響を与えたのは、10歳ころ亡くなった母方の祖父・田中一男だ。

祖父は宮崎市の赤江で町医者の子として生まれ、父親の再婚を機に姉妹を連れて京都に行き、同じく宮崎県出身の祖母と出会った。弟は軍医になったが若くして病死したという。

第2次大戦中、私の母を連れて宮崎への疎開途中、縁あって延岡に住むことになった。戦中は竹屋、戦後は自転車屋、おもちゃ屋など商売をしていた。しかし、若い頃から海や川での漁、野鳥など自然に興味を持ち、本当は農業をしたかったと聞いた。

母・稔子は一人娘であったので父を養子に迎えた。祖父は57歳で死んだので50歳前後で父に仕事を任せ、隠居していたものと思う。汽車に乗って五ヶ瀬川や土々呂などの海岸で魚を捕ったり、メジロなど鳥の世話をしたりする姿しか見たことがなかったからである。

孫の中で長男の私は特に祖父にかわいがられ、学校に行くまでは毎日、また小学校に行くようになってからも休みの日には海や川、山に連れて行ってもらった。台風で流されたが、屋形船もあった。店で多忙な両親に代わり、幼い頃は祖父母に育てられた。

戦中は竹細工の特許も取るなど器用な人で、鳥籠も竹ひごから自分で作っていた。家にはメジロが20羽くらい、その他にもホオジロ、ヤマガラ、ヒバリなどの和鳥、カナリアやジュウシマツなどの外国の鳥も合わせて100羽以上いた。メジロの品評会も多くの人が私の家に集まり、鳴き声を競い横綱や大関などの番付も作られ、サラリーマンの月給が数千円の時、横綱は2万円もした。

自分で編んだ投網や地引き網で魚を捕り、網につける錘[おもり]も石を彫って鋳型を作り、鉛を溶かし自分で作っていた。私のため子ども用の投網を作ってくれたが、うまく広げることができなかった。

ニワトリは軍鶏[しゃも]、尾長[おなが]鶏[どり]、東天紅[とうてんこう]、矮鶏[ちゃぼ]などつがいでいた。ちなみに父の実家は農家だったので私が行くと鶏をつぶして歓迎してくれた。殺すのをかわいそうとは思ったが、捕まえるのは子どもの楽しみであった。そんな時代でもペットで飼っている鶏を祖父が殺すことはなかった。

好奇心の強さ、なんでも自分でしたがること、海、山、川での遊び好き、周りの人を喜ばせることが喜びという性格など私は祖父の影響を強く受けている。



延岡駅前の実家の店頭で写した家族や親戚との一枚

(前列中央に立つ3人の子どもの左端)

(4) 中2の修学旅行を機に勉強

私が通った延岡市の岡富中学校は公立ながら、スパルタ教育で文武両道の学校だった。中体連の13競技のうち市内で12競技、県でも半数弱で優勝するなどスポーツが盛んな一方、朝夕の課外は成績順にクラス分けし、成績が落ちれば屋上で正座させられていた。そんな中学校で私は中学2年まで家で宿題以外の勉強をすることはなかった。



延岡西高校の同級生と(後列右端)

子どもの時はラジオの楽しみとして「赤胴鈴之助」などの番組を聴くくらいであった。延岡でテレビが映るようになった頃は、近くの家に集まってプロレスなどを見せてもらっていた。家でテレビを購入してからは、家族だんらの中心がテレビになった。毎晩家族でテレビを見るのが楽しみで、9時になると寝るのが習慣だった。延岡には小学校時代、そろばん塾や書道の先生だけで、いわゆる学習塾はなかったと思う。

そんな環境でもあり、中学に入っても勉強していなかった。それが一転したのは中学2年の修学旅行からだった。先生に家での勉強時間を申告しなくてはならなかったが、時間が少ないと持っていく小遣いを減らすとのお達しがあり、「それでは困る」と勉強を始めた。テレビをやめるのは嫌だったので、親に9時以降も起きて勉強させてほしいと頼んだ。その直後の試験で、成績が学年で50番くらいからトップ争いするようになり、その後、勉強に打ち込むようになった。

中学校卒業後、同級生の就職列車の見送りに行ったことがある。中卒は金の卵といわれ、宮崎県からも就職列車が大阪、岐阜、東京へと走っていた。岡富中学の友人の多くは高校進学だったのでそれほど理解できなかったが、号泣する家族の声が今でも思い出される。そんな時代だった。

高校は延岡西高校であった。実は小児まひの弟の足を治そうと幼い時から医者になりたいと思っており、成績からも現実味が生まれたので医学部を目指して勉強に打ち込み、成績は3年間トップを争った。一方、友達に誘われ科学部に入り、ウニを集めて徹夜で胚の発生を観察したり、水質調査をしたりして、生物学にも強い興味を持つようになった。延岡沖の離島・島野浦島で合宿をしたのもいい思い出だ。

また、高校2年の時、友達3人と自転車で鹿児島県の指宿往復の3泊4日の旅行をしたほか、男女6人で交換日記もしたことがある。それなりに青春も謳歌[おうか]していた。

(5) 学生運動のさなか九州大入学

大学紛争で東京大入試が中止されたのが高校2年生、皇国主義を唱える三島由紀夫が割腹自殺したのが予備校時代の1970(昭和45)年だった。当時はベトナム戦争中でもあり、若者の多くは戦争反対という大義名分に共感していた。さらに、その戦争に加担することになるとして、日米安保条約に反対の立場からアメリカ=自由主義国のアンチテーゼとしての共産主義にひかれていた。

高校2年生の時、弟が足の手術を受け、医者になる動機が薄れ、生物学や数学に興味が強くなり、アメリカへの留学も含め進路に悩んだ。最先端の生物学は医学部が中心ということを聞き、九州大医学部を受け、合格できず東京の予備校に行った。一人で夜行列車に乗り、遠い親戚を頼って東京に行ったのが初めての一人旅であった。



九州大時代のキャンプで(中央)

予備校では天才とっていいような友人と出会い、数学者への夢を諦めた。東大理3(医学部)の確実圏に入ったが、九州に帰ることにし、再び九大医学部を受け、第2志望の農学部に入學した。

九大に入學した71年、全国的に学生運動は沈静化しつつあった。しかし、米軍機墜落事故のあった九大は例外で、1年生の時に無期限ストに入り授業ができるような状態ではなかった。私は学生運動の党派に属さないノンセクトだったが、無関心なノンポリではなく、1年時にクラスの代議員に選出された。

刃物で手を傷つけられたり、割れた瓶を頭に突き刺したりの大荒れの代議員大会で、死者が出るのではないかと心配した私は消火器の泡を吹きかけて沈静化させたこともあった。

無期限ストの期間中、生物研究部のつながりで昆虫学者の白水隆教授の研究室に入り浸り、鹿児島県の沖永良部島に蝶[チョウ]の採集にも行った。白水先生は蝶の権威者で、100種を超える昆虫の新種を発見していて、昆虫の食草としての植物にも詳しくあった。その影響で、植物友の会やシダの会に入会し、植物の分類の勉強に夢中になった。毎週のように登った福岡県内の山だけでなく、くじゅう、屋久島などでも植物採集をした結果、部屋は標本であふれた。

鍾乳洞の研究や環境問題のゼミの開催など、授業以外でも活動した。これらの知識、経験がその後の研究生生活に大いに役に立った。よく言われるが役に立たない経験はないものである。

(6) 初めての海外は新婚旅行

大分県臼杵市生まれの妻・三恵子とは九州大の大学院時代に知り合った。

当時、妻はユニードというスーパーマーケットの福岡市にあった商品試験室で働いていた。専門は繊維関係で、クリーニングなどのトラブルについて検査をしていた。研究員が4人の小さな試験室であったので、広く商品の苦情や相談に対処していた。

その中に中国産の乾燥したシダ植物があり、ゼンマイということで販売していたが、熊本の消費者から「ヘゴ」ではないかという苦情があり、九大農学部にも相談にきた。当時、植物分類に詳しい先生がいなかったので大学院生の私に相談が回ってきたのだ。



新婚旅行先のグアムで

ヘゴとは正確には鹿児島以南にある木性のシダで、南九州ではシダ植物の総称でもある。ゼンマイはシダ植物の中でも特異な分類群であり、維管束という内部組織の構造も異なる。

中国の植物図鑑も持っていたが、胞子を付けた成熟した葉がないとシダ植物の分類を見極める同定は困難である。依頼されたものは乾燥したシダ植物の新芽で、しかも中国産ということもあり、同定どころか水に戻してもゼンマイと異なるのかどうかも分からなかった。そこで預かって調べることにしたが、結局、判定できなかった。

ゼンマイは一般に、新芽を乾燥して貯蔵し、それを調理して食べるので成熟した葉を知っている人は少ない。ゼンマイを見せるため福岡県の植物友の会の例会で太宰府に近い天拝山に行ったのが初めてのデートとなった。

学生であったが、博士課程に進学する直前に結婚し、新婚旅行はグアムに行った。日本人が観光で海外に行き始めたころで、飛行機に乗ったこともない。まして外国に行ったこともなかった。見るもの、聞くもの、全て珍しく、温室以外で熱帯植物を見たのもこの時が初めてであった。

娘2人に恵まれたが、学生結婚だったので、主に働いていた妻に養ってもらうことになる。妻は仕事に、私は研究に、忙しい中での子育てだった。妻は手抜きをするのが嫌いで苦勞をかけた。そんななかでも娘たちは素直に育ち、充実した日々を送った。その後、私の九州東海大農学部(当時)への就職で、妻は仕事を辞め、熊本に来て消費者問題を中心に活動し、熊本消費者協会の設立に携わり最初の事務局長、その後会長を務めた。

(7) 農学者・大蔵永常に影響を受ける

江戸後期に大蔵永常という人物がいた。江戸時代の三大農学者の一人で、大学院時代にその足跡を知り、大きな影響を受けた。

きっかけは九州大図書館の「江崎文庫」でツバキについて江戸時代の資料を探している時、大蔵永常の「徐蝗録[じょこうろく]」を見つけたことだった。「蝗」はイナゴのことで、稲を食べるイナゴをはじめ、作物の害虫の防除法を記してあった。



農学者・大蔵永常が著した「徐蝗録」に載っているクジラ

の絵。鯨油は殺虫剤として使われていた

当時は変体仮名を読めなかったが、いろいろなクジラやイルカの絵が入っていたのにひかれたことを覚えている。農業の本にクジラとは不思議な取り合わせと思われるかもしれないが、鯨油には殺虫剤としての効用があるのだ。

私が博士論文でツバキの研究で訪れた長崎・平戸は、江戸時代の主産業が捕鯨だったことも大蔵永常への関心を促した。ちなみに1939年に冷蔵庫を積んだ捕鯨船ができるまで、捕鯨は食用のためではなく主に鯨油を取るためだった。

大蔵永常は農学者として名高いが、出身地の大分・日田では同時代の儒学者で、教育者の広瀬淡窓ばかりが有名で大蔵永常は知られていなかった。日田を訪れ、広瀬淡窓の私塾「咸宜[かんぎ]園」の記念館で問い合わせても名前ぐらいしか知らないという返事だったし、大分県の農業試験場の研究員の方でも名前さえ知らない状態だった。

その後、日田市にも資料館ができ、大分県が1995年に設けた「先哲史料館」が出版した郷土の偉人の本にも大蔵永常が含まれ、喜んだものだった。大分県の試験場の研究アドバイザーをしていることもあり、2010年に大分県で園芸学会が開かれた折、長年研究してきた「大分出身の江戸農学者大蔵永常に関する研究」を発表することができたのも、いい思い出となった。

江戸時代の農業関係の書物を集めた「日本農書全集」(農文協)を買った時、まず読んだのが大蔵永常であったことは言うまでもない。大蔵永常は多くの農書を出して生活していた。手掛けた本は、顕微鏡を使って花粉の観察をするなど内容が高度なだけでなく、挿絵やルビを多用し、農家の方にも分かりやすい表現で書かれていた。

考え方も素晴らしく、「広益国産考」に農学の役割は「お上のためではなく、民が潤うため」とあった。この言葉に感銘を受けて、人々の役に立つ研究を心掛けるようになった。

(8) 憧れのパプアニューギニアへ

大学院時代の1979(昭和54)年、鹿児島大教授の有隅健一博士の「マレーシアシャクナゲの研究」の一員として、パプアニューギニアを2カ月間訪ねた。出発する時の感動は今でも忘れられない。

もともと好奇心が強く、人跡未踏の地に行く機会を狙っており、パプアニューギニアは特に行ってみたい国だった。九州帝国大教授の金平亮三博士が戦前、ニューギニアでの植物調査について書いた「ニューギニア探検」という本をわくわくして読んでいたからである。しかも、金平博士に同行したのが、若き日の日本を代表する植物分類学者の初島住彦博士。私の学生時代は鹿児島大名誉教授で、既に70歳を過ぎておられたが、一緒に植物採集で山に登ったこともあった。



パプアニューギニアの民族衣装をまとった人(右)と

私はハルサザンカの起源に関する研究や植物の知識などで評価されていたのかもしれない。主に発表していた園芸学会ではなく、植物学会で特別講演を頼まれたこともあったが、それにしても憧れの地へ実際に行くことになるとは思いませんでした。ビーグル号によるダーウィンの世界一周調査旅行や若き日の初島博士と重ね合わせ、興奮した。

2カ月間の滞在のほとんどは山岳地帯で過ごした。どの家もサツマイモを主食として栽培していただけでなく、弓矢で狩猟し、野草を採取して暮らしていた。石斧[せきふ]こそ使っていなかったが石器時代と変わらない生活で、家に家具があるわけでもなく、ブタとともに暮らしていた。

自然も興味深かった。デンドロビウムなどの野生ランが木に着生し、シダ植物やシャクナゲの種類も多く、熱帯植物の多様性を見ることができた。動物はクスクスなど有袋類の地域で、早起きすると極楽鳥は求愛ダンスを見せてくれた。この体験が私の植物や生物、人と文化、熱帯に対する好奇心をさらに高めたことは言うまでもない。

冒険心に火をつけた本「ニューギニア探検」については後日談がある。1942年の出版とあって改めて読むにも諦めていたが、インターネット検索で、近代の日本人探検家を顕彰する「西堀榮三郎記念探検の殿堂」(滋賀県東近江市)で復刻版が売られていることを知った。博士の長男の奥さまで東京都の最初の女性副知事をされた金平輝子さんが、ご主人が大切にしていた本であり、博士を尊敬していたため、自費出版されたとのことで、本を送っていただいた。

(9) 開設間もない農学部に赴任

九州東海大(現・東海大)が農学部を開設したのは1980(昭和55)年で、その2年後の82年に助手として採用された。

私は80年に5年間の大学院を修了して、その年に創設された福岡県農業大学校で非常勤講師をしていた。同じ時期に九州大、岡山からの採用や、国の学術奨励金を受けて研究を続ける話もあったが、九大の恩師・上本俊平教授に勧められ九州東海大農学部農学科の助手として熊本への赴任を決めた。



開設間もないころの農学部の校舎＝1980年

東海大創設者で初代総長の松前重義先生は工学博士だった。19世紀にプロイセンとの戦争に敗れたデンマークが荒廃した国土を教育と農業で短期間に立て直したことに影響されてつくったのが東海大である。

松前先生は嘉島町出身で愛郷心が強かった。農学部創立も、九州東海大の顧問だった林寛信[かんしん]先生から「農業県なのに熊本大などに農学部がないのでつくってほしい」との助言を受けたことなどから決断されたと聞いている。

いわば松前先生肝いりの学部である。経済成長路線の結果、農業は後継者が少なく、農学部新設には土地や施設などに高額のコストが必要なので国公立を含めて無謀とされていた時代ただけに、熊本と農業に強い思いがあったからだといえるだろう。

松前先生の建学の精神に基づく人づくりの思いを象徴したような学部は、長陽村(現・南阿蘇村)はじめ阿蘇の人々にも愛され、大学、農場・牧場・加工場、学生村が一体となったすばらしい環境だった。大学入学時より学年が上がるにつれて農業に対する思いが強くなり、4年間で学生が人間的にも見違えるように成長する学部である。

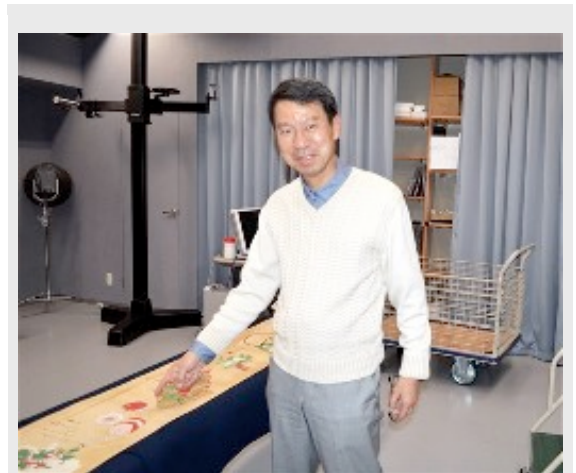
周りの教職員の方々にも恵まれた。外山三郎先生、藤井義典[よしすけ]先生ら歴代の学部長をはじめ、私が専門とする蔬菜花卉[そさいかき]園芸学研究室の初代教授の松村正先生にはお世話になった。チーズの権威者・小林弘昌先生、井越敬司先生、熊本市の江津湖の研究・保全で知られる梶田聖孝先生とはわが家で餅つきをするなど家族ぐるみで付き合った。学生アパートが立ち並ぶ学生村の大家さんたちも素晴らしく、親しくさせてもらった。

教職員や学生ともよく飲んだ。創設当初は教職員で囲碁やマージャンの大会など親睦を深める企画も多かった。今でも飲み会には多くの教職員が集まり、愉快的な学部の伝統を保っている。

(10) 研究変更で肥後六花との縁

熊本に赴任するまで熊本と無縁だった訳ではない。故郷の延岡市や高千穂町など宮崎県北部から熊本市までは、県庁所在地の宮崎市に行くのと同じくらいの感覚で、延岡には熊本県出身の方も多かった。そして私の研究も大学院進学時に熊本との縁ができていく。

九州大3年生の時、園芸学研究室に入り、上本俊平教授の下でポンカンの成長に関係する物質を卒業研究のテーマとした。材料のポンカンが鹿児島県指宿市にあったため、取り寄せての室内実験が中心。大学院に進学しても、卒業論文の研究を継続することが多いのだが、現場で作物、植物を扱える研究に課題を変えてほしいとお願いした。



肥後六花研究の一環で訪ねた東京・根津美術館。指さして

いるのは「百椿図」

その頃、蔬菜[そさい]園芸の大家で国の九州農業試験場長などを務められた熊沢三郎先生が、福岡県久留米市から故郷の長崎県平戸市に帰られ、平戸ツツジの研究だけでなく、平戸のサザンカの本木の研究を箱田直紀博士(当時・東京農工大助手、現在日本ツバキ協会会長)の協力を得て始めておられた。

熊沢先生が九州農試時代に指導した研究者のうち10人ほどは大学教授になり、日本の蔬菜園芸学の研究を発展させた。学生時代の恩師の九州大教授・藤枝國光博士も門下だった。

そうした縁で大学院から熊沢先生の指導でハルサザンカを研究することになり、ツバキやサザンカなどの品種起源の研究はライフワークとなった。一昨年、平戸で講演を頼まれた時、熊沢三郎記念館ができており喜んだものだった。なお、九州東海大(当時)の研究室で私の上司だった松村正博士も熊沢門下である。

話を戻すが、研究対象がツバキやサザンカだったので、熊本にも肥後サザンカの見学で訪れた。40年ほど前のことだが、今でもよく覚えている。箱田博士と一緒に熊本市役所の大藪重利氏の案内で、肥後ツバキの生産販売を手掛ける椿寿[ちんじゅ]園(松橋町、現・宇城市)の太田次雄氏、肥後サザンカ保存の中心になっていた「肥後さざんか協会」の杉山貞純会長、田中正一副会長のご自宅に伺い、お世話になった。

結局、これが肥後六花に関わるきっかけになった。九州東海大赴任後は、大学の顧問で肥後ギクの「愛寿会」の故・林寛信[かんしん]会長や源嶋尚之現会長、肥後ツバキ協会(会長・熊本市長)の井上一則副会長ら魅力のある方たちと知り合い、長い付き合いとなった。熊本には何か私をひきつけるものがあったようだ。

(11) 新品種契機に「さざんか祭」も

昨日の第10回に続き、大学院時代に始めたツバキやサザンカの研究に関する話をもう少し紹介したい。

博士論文は、花の少ない冬場に咲き、サザンカのかれんさ、ツバキの豪華さを併せ持つハルサザンカの起源に関してまとめた。その対象は、長崎県平戸市に多く自生しているハルサザンカだった。

研究の結果、樹齢400年以上の古木で、「凱旋[がいせん]」という名前の品種が、原種サザンカにヤブツバキが自然交配した1次雑種で、ハルサザンカの原木であることを明らかにした。



私の研究からサザンカ祭りが始まった久留米市の

観音寺で住職と(左から2人目)

形態的な特性やDNA分析、染色体数などに加え、歴史資料も重要な研究材料だった。宮内庁所蔵で1700年以前に出来上がったと推定される「椿花[ちんか]図譜」の中に、ハルサザンカの品種「平戸」があることも、ハルサザンカの起源は南蛮貿易で栄えた江戸時代初期の平戸であると考えの根拠となった。

「凱旋」は長崎県が2010(平成22)年3月に「平戸戸石川[といしかわ]のハルサザンカ」の名で天然記念物に指定し、「植物学ならびに園芸学上貴重」と位置づけている。こうした歴史をさかのぼって成り立ちを解き明かしていく研究には夢とロマンを感じて没頭した。平戸のハルサザンカでは、三大悲恋伝説にちなんで名付けられた品種「佐用媛[さよひめ]」が、「凱旋」にヤブツバキが「戻し交雑」した2次雑種であることなども明らかにした。

ツバキ、サザンカの研究では熊本県内はもちろん、東京都の伊豆大島、長崎県五島列島などを回り、いろいろ思い出深い。

福岡県久留米市もそうした土地だ。久富舜介氏はじめ植木生産者の方たちに協力していただき、たくさんの古木を探した中に、「観音寺」という新品種を見つけ出した。

久留米市田主丸町にある天台宗の石垣山観音寺にあり、品種名がなかったので仮の名前として寺名を付けていた。発表などをしているうちに品種名になった。

観音寺は673年に創建された天台宗の由緒あるお寺で、ミイラ化した「牛鬼の手」を秘蔵することでも知られている。境内にはオオバボダイジュやクスノキの大木があり、ハルサザンカ「観音寺」はその中央にある。2月から3月にかけてかれんな赤い花を咲かせる。私の研究を契機に市指定天然記念物となり、2月の第3日曜日に「さざんか祭」が開催されている。

(12) 客員教授で念願の米国留学

九州東海大に赴任して6年目の1987(昭和62)年、念願のアメリカ留学が実現した。ノースカロライナ大の客員教授としてだった。

念願と書いたように、アメリカで勉強したいという願望は高校時代に芽生えたものだった。弟の足を治そうと医師を目指したが、高2の時に弟が手術を受けたので、医師になるというモチベーションが低下。志望動機も医学部で最先端の生物学を研究したいというものに変わっていた。それなら思い切ってアメリカで勝負したいと思ったのが留学を考えた最初だった。



ノースカロライナ大のパークス先生(左)宅での歓迎会で

当時、日本はまだまだアメリカに追いついていないという意識があった。親からの仕送りでアメリカに行く裕福な家庭の学生は少なく、奨学金などをもらいアルバイトなどで自活しながら勉強するくらいの覚悟で留学を考える時代だった。アメリカ留学を紹介する本には、渡航費の安い船の利用や、「物価が高いので散髪代も『Hair cut only』で済ますと良い」などがアドバイスとして載っていた時代。しかし、留学の準備をする時間が少なかったので安易な道として九州大の医学部を受験。結果的に不合格となったのは既にかいた通りだ。

大学院進学を考えた時が2度目の機会だった。フルブライト奨学金に応募しようと考えたが、アメリカで博士号を取っても日本で就職するのは難しいと指導教官に説得され、九大の大学院に進学した。今考えるとそれでも留学した方が良かったのかもしれないと思う。その反省から教え子たちには若い時の留学を勧め、研究室の学生を毎年のように外国に送ってきた。

留学先をノースカロライナ大にしたのは、同大のパークス博士とアメリカ農務省国立樹木園の故アッカーマン博士が、当時のツバキ属植物の育種家であり、権威者だったからだ。私が大学院生の頃、平戸を案内したアメリカ人研究者のクリーチ博士がアッカーマン博士の同僚であることが分かり、アッカーマン博士の初来日時からお付き合いが始まっていた。

米国での博士課程への進学を相談したところパークス博士を紹介していただいた。しかし、結婚や九州東海大への就職があり、すぐには日本を離れることができず85年に九大で博士号をとった翌々年、ようやく客員教授として1年間ノースカロライナ大に行くことになった次第だ。35歳になっていた。

(13) 新品種について妻の名前

留学先のノースカロライナ大チャペルヒル校は、州立だがアメリカの大学でトップ10に入るほどの名門大学だった。私は博士号を持っており、東海大からの派遣の形だったのでパークス先生の計らいで客員教授として1年間在職し、多くの教職員、学生にお世話になった。

客員教授といっても授業はなく、実質的には研究者だった。当時の日本と異なり、研究室に学部生はおらず大学院生だけで、研究設備も整っていた。ただ、理学部だったため、毎日室内の実験だった。それでもパークス先生らが農業関係の講座があったノースカロライナ州立大の園芸学部を案内してくださるなど、農業関係の現場にも触れることができたのはありがたかった。

関心のあるツバキについてアメリカ各地の庭園を見て回る時には、家族でお宅に招待されたことも多かった。2人の娘は地元の小学校に通わせ、妻は教会でのボランティアによる英語学級に通った。家族にとっても思い出深かったはずだ。

アメリカではハルサザンカの類縁関係について研究した。DNAを研究する分子生物学が主流になろうとしていた時代だった。葉緑体のDNAが細胞質遺伝をすることを知り、DNA分析によるハルサザンカの母親(種子親)探しを始めた。

とはいえ、親と推定したサザンカとヤブツバキのDNAで異なる部分を見つけるのはなかなか難しく、結局、2005年まで20年かかってサザンカが母親、ヤブツバキが父親であることを明らかにした。このように私の研究には、時間と労力のかかるものが多かったが、未知の分野に迫るのが楽しく、わくわくして研究していたものだ。

ところで、分子生物学的手法での植物分類と一緒に始めた中国の留学生キューさんは、その後DNA分析から被子植物の新しい分類体系「系統樹APG」を作った。新エングラ一分類やクロンキスト分類などと呼ばれる従来の分類体系と大きく異なり、DNAという揺るがぬ証拠に基づいた分類だ。その論文に私の名前も入れましようかとの話もあったが遠慮した。

その代わりというわけではないだろうが、パークス先生から数年前のクリスマスに素敵なプレゼントがあった。ハルサザンカの新品種に妻の名前「Mieko Tanaka」を付けたというのだ。



客員教授の任期を終え、帰国途中の旅行でロッキー山脈を

バックに写した家族写真

(14) 有機農業の大切さを痛感

殺虫剤によって昆虫が死に、有機肥料を用いなくなったことでミミズなど土壌にすむ動物が少なくなり、それを食べる鳥が減ってさえずりも聞こえない…。アメリカの科学者レイチェル・カーソンは1962年に著した「沈黙の春」で、化学農薬や化学肥料による環境破壊に警鐘を鳴らした。

その後、化学農薬は人にも危害を及ぼすことが明らかになっていった。一方、消費者問題をライフワークとする妻が安全で安心できる農産物の生産を期待していることは、私も当然承知していた。



ダイコンとキャベツの有機栽培について調査する学生たち

＝2003年5月

しかし、無農薬で野菜を作ることが困難なことは、実際に作ってみればすぐに分かる。国や県などの農業試験場や大学において無農薬で作物を栽培することはほとんどなく、現在でも園芸学会で有機栽培に関する発表はほとんどない。

一方、私はそれまでの経験から、アブラムシやハダニは農薬を使わなくても水の散布だけで防除できることに気付いていた。昔から行われている天敵による防除も含めて、化学農薬を用いない野菜栽培について研究してみたいとの思いがあったのも事実だ。

そうした中で、1992年に九州東海大学地球環境問題研究会編で出版された「熊本発地球環境読本」の中に「第4章 環境にやさしい農業技術のすすめ」を執筆したことは転機となった。アメリカで96年に出版された「奪われし未来」の中で、内分泌かく乱物質(環境ホルモン)の半分以上は農薬であると指摘したことも、有機農業の大切さを痛感することになった。

以来、研究室の卒業論文として根菜類のダイコン、葉菜類のキャベツ、果菜類のトマトについて、従来からの慣行栽培と比較しながら無農薬、無化学肥料の有機農業を研究している。農薬を使っていた時には発生しなかった病虫害が次々に生じ、諦めそうになったことも多かった。環境が一定した研究室内の研究と違って、作物栽培の研究はデータが取りにくい困難もあった。

害虫の天敵探しに始まって、害虫や病原菌を抑える菌の開発などがオランダを中心に日本でも進み、商品化されるようになった。化学農薬に頼らない対策は、このようなさまざまな技術を組み合わせることで可能になるめどがついてきた。私は10年以上研究して、有機農業に関する論文は書けなかったが、使命感で行う研究もあってよいと思う。

(15) 戸田義宏先生の思いを受け継ぐ

東海大農学部は多くの先生方の貢献で発展してきた。忘れられないのが農学部創設時に赴任し、九州東海大時代に学部長も務められた戸田義宏先生だ。

2003(平成15)年10月に60歳で亡くなられたが、同じ延岡市出身ということもあり、懇意にしていた。先生はスギ、私はツバキと対象は違うが、同じように染色体が研究の一つだった。先生が博士号を取得された時の主査は九州大の故須崎民雄教授(延岡市出身)で、私も学生時代お世話になった縁もあった。



「一心行の大桜」のDNA鑑定結果の説明をする戸田

義宏先生(右)＝2003年3月、白水村(当時)で

戸田先生は研究者として優れていただけでなく、教育者としての熱意も人一倍だった。都市や学校の緑化を訴えて精力的に活動し、熊本市の学校や民間対象の緑化コンクールの審査も長く務められるなど、“緑の伝道者”でもあった。

植物についての知識や興味では誰にも負けないつもりだったが、戸田先生には一目置いていた。植物の環境に果たす役割や人間との関わりなどについて「緑からのメッセージ」と題して、講演や展示会活動を通じて訴えてこられた。先生と接して、素晴らしい人柄と情熱に感動された方も多いのではないかなと思う。気さくな語り口が今でも聞こえそうである。「自然に耳を傾けなさい、植物をよく見てごらんなさい」と。

学生に対しても真摯[しんし]な態度で接していた。その姿勢を見習い、「先生のように」と心掛けてきたのは言うまでもない。かつて学生・教職員に対して管理的な学部運営がなされていた時期もあったため、先生はじめ“同志”の方々と一緒に必死の思いで「改革」を訴えたこともあった。

その後、先生は学部長になられたが、体が悪いにもかかわらず無理をされて寿命を縮められたのではないかなと思うと、申し訳ない思いでいっぱいだ。

しかし、先生の思いは今も生きている。菊陽町原水の美しい生け垣が続く「鉄砲小路」の保存活動はその象徴だろう。防災と景観を両立する「緑の垣根運動」を提唱した戸田先生の呼びかけで1982年に学生有志が剪定[せんてい]奉仕を始めた。長野克也教授が受け継ぎ、社会貢献支援財団から09年に社会貢献者賞を授与された。

地域の自然を残すために緑化や野外活動に取り組む「グリーンヘルパーの会」も戸田先生らと始めた活動だ。私は顧問として、先生の思いを絶やすまいと誓っている。

(16)「世界の肥後ツバキ」を誇りに

「肥後六花」とは言うまでもなく、肥後の名を冠するツバキ、シヤクヤク、ハナショウブ、アサガオ、キク、サザンカだ。長年関心を持ってきたこれらの花について今回から語りたい。

まずは肥後ツバキ。熊本で最初から育成された特有の品種群ではない。熊本藩細川家の江戸屋敷のあった白金[しろがね]の植木屋文助が30品種ほど保有していたツバキのうち「日本錦[やまとにしき]」「長楽[おさらく]」「蜀紅[しょっこう]」「紅梅」など12品種を藩士・山崎貞房が1841年に導入したことに始まる。

その後、熊本で幾つかの形質にこだわって育てられた結果、品種は百を超える。その特徴は一重の大輪で、雄しべは筒状に見えるヤブツバキと異なり、梅のように広がっている。「ラッパ咲き」ではなく「平開[へいかい]咲き」でもある。

ツバキが盛んで品種も多く生まれた地域では、地名を冠して江戸ツバキ、京都ツバキ、久留米ツバキ、伊予ツバキなどと呼ばれる。しかし、肥後ツバキのような特有の形質があるわけではない。その点で肥後ツバキは特別な存在である。

実は、肥後ツバキらしいものの出現は宋時代の中国で、現存するツバキ属の種・セッコウベニバナユチャ(浙江紅花油茶)とよく似ている。これとよく似たものが「朝鮮椿」という名前で江戸時代に見られる。

一方、日本で1630年に出た「百椿集[ひゃくちんしゅう]」には、1615年暮れから多くのツバキ品種が現れたと書かれており、1633年(推定)に描かれた「百椿図」に「ツンボ大工」という品種がある。肥後ツバキに似た形質を持っていることから、私は肥後ツバキの起源はこの頃と推察。形態的な特徴や染色体、DNA、歴史などを研究して、中国産のトウツバキあるいはセッコウベニバナユチャとヤブツバキ間の雑種が始まりではないかと考えている。

肥後ツバキの愛好家は県内にとどまらない。学生の頃、久留米にはハウス2棟に数百の盆栽の大コレクションを持っている方がいた。海外にも肥後ツバキ協会の会員は多い。イタリアの愛好家は2000年に「Higo Camellia」という本を著し、08年頃にベルギーには肥後ツバキ園ができたと聞いた。国際ツバキ大会では「熊本から来た」と言っても通じないが、「肥後」だとすぐ分かる。世界の肥後ツバキの聖地である熊本の人は、肥後ツバキをもっと誇りにしていいと思う。



肥後ツバキは海外でも人気が高く、海外からの視察を

案内することも少なくない＝熊本市西区、2015年

(17) 技術考案の先人に感心

ツバキは地植えが一般的であるのに対し、肥後ツバキだけは盆栽で楽しむことも多い。

盆栽は長い年月をかけて剪定[せんてい]や枝の誘引などで美しい姿に仕上げ、それを維持する技術だ。小さな鉢で育てるので毎日の水やりが必要で、それを長い年月維持する。そのような過酷な条件に耐え、美しさを増す植物はマツやウメなどに限られ、ツバキは向いていない。そのため肥後ツバキでは特殊な技術が発達してきた。



中2の時、父に買ってもらった顕微鏡と最初に作ったツバキの標本。ツバキの研究を長く続けるとは思ってもいなかった

その盆栽作りは、大きく形のいい台木を選び、樹勢を弱めて接ぎ木をし、数年で形を作る。最初に手掛けた人は、一重で大輪の肥後ツバキが、数あるツバキの中でも盆栽に向いていることを知っていたのであろうか。

日本で接ぎ木の技術は、遅くとも安土桃山時代にボタンで始まった。ツバキ品種の繁殖も江戸時代の専門書「草木奇品家雅見[かがみ]」の図などから判断して、挿し木ではなく接ぎ木が主流であった。しかし、ツバキでは挿し木が主流になり、第2次大戦後に接ぎ木はみられなくなった。

例外が「呼び接ぎ」という肥後ツバキの接ぎ木技術を伝承していた太田次雄さんだった。松橋町(現・宇城市)で「椿寿園」を経営していた太田さんは、さらに「瓶接ぎ」という独特な接ぎ木法を開発。その後、肥後ツバキではこれが一般的になった。

2010年に97歳で亡くなられたが、随分お世話になった。「瓶接ぎ」は江戸時代に書かれた「草木育種[そうもくそだてぐさ]」に載っている「水接ぎ」とほぼ同じであるが、太田さんから直接聞いたので、独自に開発されたのは間違いない。その工夫には感心させられた。

平和な江戸時代に園芸はみんなが楽しむ文化として発達し、多くの品種ができた。一方、戦争の時代には文化も廃れる。第2次大戦前後に日本で、花首から落ちるツバキは縁起が悪いとされ、多くが切られた。家族が戦争に行っている家族の心情も理解できる。

しかし、江戸中期の元禄年間に武家など上流階級に始まったツバキ愛好ブームは1700年頃から大衆化し、昭和初期まで続いたことから分かるように、縁起が悪いとされたのはごく一時期であった。

太田さんによると、戦後少したった頃、肥後ツバキの古木とその品種名を知っていた方のおかげで、肥後ツバキ協会が再建され、肥後ツバキブームが起きた。

(18)ドイツの友人と共同出版の夢

国内外にツバキの愛好家は多く、各県に日本ツバキ協会の支部があり、日本の協会は国際ツバキ協会に連なっている。しかし、熊本の肥後ツバキ協会は他の組織とつながりのない独立型で、他の品種に関心のある人はそれほど多くない。他地域の愛好家が肥後ツバキにも強くひかれているのと対照的である。

ただ、そんな国内外の愛好家も肥後サザンカへの興味は薄い。肥後ツバキと同じツバキ属なのに、あまり知られていない存在だ。

肥後サザンカの起源は1879(明治12)年に最初の品種「大錦」が発表され、1902年に愛好家の「晩香会」が結成されたことに始まる。「大錦」は京都から持ってきた種子をまいたものとされている。一重で大輪という肥後六花に共通する特徴を持ち、肥後ツバキと同じ梅芯や平開咲きでもあり、肥後サザンカの理想とされている。

一方、肥後サザンカには八重の品種も少なくない。もともとサザンカにはツバキと比べてかれんで清楚[せいそ]な一重の品種が多い。そのなかで、熊本では豪華さも併せ持つ八重の品種も育成され、愛好家が捨て切れなかったからであろう。

肥後サザンカとして登録されている43の品種は銘花ばかりだ。肥後六花の中では歴史が最も新しいが、他のサザンカ品種と比べれば秀でている。しかし、サザンカ自体はツバキほど品種数は多くなく、花もツバキより控えめである。サザンカだけに興味を持つ愛好家は熊本以外にはほとんどいないのはそれ故で、協会組織も肥後さざんか協会だけだ。

ツバキ愛好家には本来なら初春に咲く花を一年中楽しみたいという願望がある。夏に咲くアザレアツバキが1985年に中国で発見され、ツバキとの交雑で夏にも咲く品種群が近年育成されているほどだ。

同様に、秋から冬に咲くサザンカがほしいとの声も世界各地の愛好家から出ている。2012年に久留米で開かれた国際ツバキ大会で肥後サザンカを紹介した。他のサザンカに比べて多種多様で、外国では特に好まれる八重の品種があることを知った参加者から質問が相次いだ。今後、肥後サザンカへの関心も高まってほしいというのが切なる願いだ。

経済学博士で実業家でもあるドイツの友人ゲオルクさんは肥後ツバキ、肥後サザンカに関心が深く、それぞれの協会の名誉会員となった。一緒に肥後ツバキ・サザンカの本を出版しようと計画している。



肥後さざんか協会のみなさんと(中列右端)=2016年11月

(19) 肥後菊花壇作りに学生と励む

東海大農学部で学生たちとともに、「肥後菊花壇」作りに1993(平成5)年から取り組んできた。

肥後ギクは、その中興の祖とされる熊本藩士・秀島七右衛門(号・英露)が1819年に著した「養菊指南車[ようぎくしなんしゃ]」という栽培法指南書によって天下に知られるようになり、肥後菊花壇が伝統として受け継がれてきている。

肥後菊花壇は3列構成で、前列から後列にかけて花の背丈を段々高くしていく。花は一重で、色は紅・白・黄。花弁はそれぞれ平弁[ひらべん]とストロー状の管弁[くだべん]を用いる。この3色2形態の花が、隣り合わせにならないよう互い違いに配置していく。



肥後菊花壇の前で学生と＝南阿蘇村の阿蘇校舎で、

2007年11月

このため一番小さな3間花壇(幅5・4メートル、奥行き0・9メートル)でも、前列は小菊10品種、中列は中菊9品種、後列は大菊10品種の計29品種が必要となる。栽培にも大変手間がかかるのは言うまでもない。しかし、このような細かな決まり事が素晴らしい美しさを生み出している。

農学部で始めたのは、肥後ギク愛好家で作る「愛寿会」の重鎮で、農学部創設にも関わった林寛信先生(2007年、96歳で死去)との話のなかで、伝統を受け継ぐ大切さを感じたからだ。

林先生は戦後間もない参院選挙に立候補した関係で東海大創設者の松前重義先生と知り合い、松前先生の衆院議員時代は選挙参謀も務めておられた。林家は代々、愛寿会に携わり、先生も会長を長く務められた。病気の時も入院先を抜け出して花壇の世話をされていたというほど情熱を持っておられた。

林先生には、花壇を1年をかけて作るなかで精神修養をするものと教えていただいた。用いる花や花壇の作り方で、陰陽の思想、天地人の世界観、仁義礼智信という五つの徳目を表しているという。一般に、花は咲かせて美しさを観賞するものであり、精神修養の道具として用いるのは世界広しといっても肥後菊花壇だけである。

農学部では、林先生と、後任の源嶋尚之・愛寿会会長の指導を受け、伝統にのっとりガーデニング部の学生と大学のスタッフで3間花壇を24年間作ってきた。昨年の熊本地震の影響で阿蘇校舎での肥後菊花壇作りは、もはやできなくなった。「養菊指南車」ができて、あと2年で200年だと考えると残念である。

(20) 深刻な後継者不足を懸念

肥後六花の一つ、肥後ハナショウブも江戸からもたらされた。熊本藩士の吉田閏之助が参勤交代時に、ハナショウブの祖・松平左金吾[さきんご](号・菖翁[しょうおう])から一子相伝の約束のもとに1833年に持ち帰った。

愛好組織「満月会」がつくられ、江戸、伊勢と並ぶ三大ハナショウブの一つに数えられるまでになった。江戸、伊勢より花が大きいのが特徴で、湿地に地植えをするのではなく、正式には鉢植えで床の間に飾るのが観賞の作法となった。



彌富孝一さん(右)が丹精込めて育てている肥後シャク

ヤクは見事だ＝熊本市東区

ハナショウブは明治初期に海外に紹介され、日本のアヤメ科アヤメ属の花を代表してジャパニーズ・アイリスといわれ、世界中で楽しまれている。もちろん、豪華な肥後ハナショウブはその中心の一つである。

ただ、熊本では後継者が少ないので品種の絶滅が懸念されている。私はかつて維持に向けて品種を集めていたことがある。1990年頃には、多くの品種を集めることができた。根茎球根で多年生なので、一度植えると除草と追肥をするだけで4～5年は維持できた。

10年ほど作ったが、その後なくなり、数年前に再び集めようとしたら、なかなか手に入らない状況になっていた。福岡県瀬高町(現・みやま市)の花卉[かき]生産者に依頼したものの、前年に生産をやめていたので鹿児島などから集めざるを得なかった。今なら熊本だけでなく国内に残っている肥後ハナショウブの品種を集めることができるかもしれない。品種の維持、熊本の園芸文化のために、あらゆる方策を講じるべきだろう。

肥後シャクヤクはもっと深刻だ。後継者は少なく、熊本城の肥後銘花園などに植えられてきた程度だ。

シャクヤクはボタンの仲間である。ボタンの豪華さには及ばないが、ボタンを育てる際の台木としても用いられている。熊本で盛んになったのは江戸時代、「肥後シャクヤクの祖」とされる熊本藩士・中瀬助之進が品種改良をし、1795年に「芍薬[しゃくやく]花品評論」を著してからだ。

熊本に赴任して間もない1980年代、来熊した米国の知人・アッカーマン博士を熊本市の愛好家、彌富孝一さん(87)方に案内したことがある。このほど久しぶりに訪ねたが、丹精込めた花は変わらず見事だった。大輪で一重の清楚[せいそ]な美しさを誇る肥後シャクヤクをなんとか残したい。

(21) 肥後アサガオの栽培は“断念”

肥後アサガオは愛好家で作る「涼花会」が明治32(1899)年に発足した。夏目漱石が熊本にいた時期とちょうど重なる。

アサガオは謎に満ちた植物である。南米原産と考えられているが、パプアニューギニアにも野生している。その存在は中国で500年頃に書かれた「本草集注」(陶弘景編纂)に載っており、日本には奈良時代に伝わったとされる。



肥後アサガオの「涼花会」が丹精込めた逸品＝

熊本市・水前寺公園内「古今伝授の間」

それらのことから、私はサツマイモと同様、コロンブス以前にパプアニューギニアを経由してアジアに入ってきたものと推定している。ただし、中国でアサガオの用途は観賞のためではなく薬用植物として、熟した種子を下剤に用いていた。薬用植物としての名は「牽牛子[けんごし]」という。

日本で観賞植物として大ブームを起こすのは江戸後期になってからだ。その中に「変化朝顔」があり、国立遺伝学研究所が戦後維持してきた種子を九州大理学部の仁田坂英二教授が1997年に引き取り、江戸時代の品種の多くを復活させた。私も見せてもらったが、アサガオと思えない八重咲きなど、まか不思議な花や葉を持つ品種群だった。

当時の日本人はメンデル(オーストリアの植物学者)のように異なった性質を持つ品種同士を交雑させることもなく、また遺伝子という概念も思いつかなかったようだ。しかし、ある系統のアサガオの種子をまくと一定の割合で変わり物が出現することを知っていた。

アサガオというと有名な東京の朝顔市の鉢物は別にして、地植えで支柱を立て、蔓[つる]をはわせ次々に咲く花を楽しむものと思っている方が多いと思う。一方、熊本では奇をてらう変化朝顔のような花を嫌い、正常な一重で大輪の花に美を見いだした。肥後アサガオは、その美を強調するため全く違った仕立て方をする。「行儀づくり」と呼ばれ、鉢と草姿、花の調和を大切にするのが特徴だ。

まず小鉢に植え、本蔓を鉢の3倍ほどに伸ばす。そして最初の花を中心に第3花まで草丈の4分の1の位置に咲かせることによって鉢と茎葉と花のバランスを取る。葉は葉先が丸みを帯びる正常な州浜葉[すはまば]で、水やりをできるだけ控え、固く締まった葉を理想とする。

「涼花会」の皆さんは毎年初夏と秋に熊本市内で展示会を開いている。私は手のかかる肥後アサガオを作ることは諦めたが、丹精込めた肥後アサガオは本当に美しいと思う。

(22) 肥後六花のビデオ制作に協力

これまで書いてきた肥後六花と呼ばれる銘花は、肥後サザンカの一部の品種を除いていずれも花は一重を原則とする。六つの異なる園芸植物で一重という共通の形態を持つものが、熊本という地域で選抜されたのは偶然と思えない。

一般的に豪華な八重咲きの花が好まれることは言うまでもないし、江戸時代に熊本でも八重咲きのツバキや豪華なボタンの品種など八重の花も栽培されていた。



肥後つばき協会の井上一則副会長(左)から説明を受ける学生たち。

肥後六花への関心が若い人たちに広がることを願っている

細川重賢[しげかた]公(1720～1785)は肥後熊本藩6代藩主で、藩校「時習館」や日本最初の藩の医学校「再春館」を設立するなど名君の一方、無類の花好きだった。10冊の写生帳を作ったことも知られ、細川家伝来の文物を所蔵する「永青文庫」(東京都文京区目白台)に保管されている。

許可を得て園芸関係の多くの貴重な資料の写真を撮影したことがある。アサガオは6品種描かれていたが、肥後アサガオ特有の「行儀づくり」ではなかったし、キクも八重のものばかりだった。ツバキなど他の肥後六花はほとんど描かれていなかった。

肥後六花が確立されたのは、それ以降になる。熊本で肥後ギクの作法を記した「養菊指南車」ができたのは1819年、江戸で肥後ツバキの品種などを紹介した「文助筆記」が書かれたのは1829年だった。

私は、六花とも一重という共通性を持つようになったのは、一重でもインパクトの強いツバキのコレクションが熊本に入ってきたことが遠因になっていると想像している。

また、重賢公はじめ歴代の藩主が花好きだったことが、花作りに心魂を注ぐ清廉の士の集まり「花連[はなれん]」を生む素地になり、肥後六花の普及につながったと考える。重賢公は肥後六花の中で古いとされるシャクヤクの育種が熊本で盛んになるより以前に亡くなったが、肥後六花の祖といわれるのも当然ではなかろうか。

肥後六花は海外の園芸愛好家の間でも関心が高い。「国際花と緑の博覧会記念協会」(大阪市)は、日本の伝統園芸の代表として「肥後六花」のビデオを1年がかりで撮影し、2016年4～10月にトルコで開かれた国際園芸博覧会で上映した。私もビデオ制作に協力した。しかし、残念ながら、熊本では後継者が少なくなっている。また、農学部の熊本出身の学生でさえ、肥後六花を知らないようになってきているのが現実だ。

(23) タイ山岳民族に農業を指導

昨年10月、在位70年に及んだタイのプミポン国王が亡くなられた。タイは10回ほど訪れ、なじみのある国。特に、住民生活の向上を目指して国王が発案した「ロイヤルプロジェクト」と呼ばれるさまざまな事業の中で、国王が力を入れていた山岳民族への農業指導に協力してきたことを思い出した。

山岳民族が暮らすタイ、ミャンマー、ラオスの国境地帯は「黄金の三角地帯」と呼ばれ、麻薬の原料であるケシが栽培されていた。貧しさ故だったが、国王は安定した収入のある園芸作物を導入することでケシ栽培をやめさせようと考えたのである。併せて、国民の健康のために野菜の供給を増やすなどの狙いもあった。

この事業に関わったのは初訪問時の1984年。第3回アジア農業シンポジウムで発表するため、北部の古都・チェンマイを訪ねた際、知人でロイヤルプロジェクトの野菜作りに携わっていたメージョー大のボレイオス副学長に試験栽培の農場を見せてもらった。

タイのような熱帯・亜熱帯は雨が多く、病気が発生しやすいため野菜作りは簡単ではない。ただ、山岳部は標高が高く気温が低いので、キャベツやトマトなどの生産が可能だ。そこで阿蘇地方での夏野菜作りが参考にできると考えた。

九州の夏も熱帯の気候によく似ているため野菜を作りやすい環境ではない。阿蘇は標高が高く涼しい地の利を生かして夏野菜を作っているのだが、それでも雨がずっと病気が発生しやすい。そのため農家は夏場にハウス内でトマトなどを作る「雨よけ栽培」を導入している。ハウスは保温や暖房目的と思われがちだが、雨よけにも有効なのだ。

この「雨よけ栽培」などの技術を普及するためチェンマイを中心に活動した。ボレイオス副学長や野菜作りプロジェクトの総責任者のエカシット氏、メージョー大のニッポン助教授、私のもとで博士号を取得したサティット副学長らを通じて指導したのが昨日のここのようだ。

今では野菜を作っている山岳民族の暮らしは豊かになっており、喜ばしい限りだ。協力が認められ、国王のパーティーに招かれたことやロイヤルプロジェクトの顧問就任を打診されたこともあった。九州大の大学院時代、留学生クラブアンさんと仲良くなり、「是非来てください」と誘われたのがタイとの縁の始まりだが、以来、長く深い付き合いとなった。



野菜栽培のために、タイで普及した「雨よけハウス」

(24) 欧州の園芸事情を視察

園芸や農業事情の研究のため、ヨーロッパも何度か訪ねた。チューリップで有名なオランダのキューケンホフ庭園、イギリス最南部コーンウォール地方で発達したコーニッシュガーデンと呼ばれる大庭園、ドイツのサンスーン庭園をはじめ、スペインやフランス南部の庭園など見学した場所は数え切れない。

古代のギリシャ、ローマを含め、園芸は国が平和で繁栄した時代に発達している。まず上流階級で盛んになり、その大庭園が庶民の庭に影響を及ぼし、現代につながってきていることを改めて感じた。

影響という点では、1990年代半ばに日本で起きたガーデニングブームで、見本とされたのは主にイギリスである。イギリスの庭園はいくつかに分類できるが、日本ではやったのはイギリスの庶民の家の庭だ。玄関などにおしゃれな飾り物を置き、草花やハーブ、剪定[せんてい]しなくていいコニファー(針葉樹)などを地植えや鉢植えで飾るタイプだ。

別な言い方をすれば家を引き立たせるための庭である。本来の和風庭園は、家の中から眺めるものだった。近年、エアコンの普及で日本の住宅に縁側がなくなったし、ドアや窓からは庭を楽しむことができない。イギリスの庭が人気となったのも住まいの変化が大きいと言えよう。

ヨーロッパで興味深かったものにドイツを中心に東欧やオランダなどで盛んなクラインガルテン(市民農園)がある。熊本にも来たことがあり、親しくしているドイツの庭園研究者グレーニング博士の案内で2003年にベルリンなどを視察した。

クラインガルテンとは「小さな庭」を意味するものの、1区画が500平方メートルもあり、20平方メートル程度の日本の市民農園、アメリカのコミュニティーガーデンとは比べものにならない。

歴史も古く、1814年に始まった農地の賃借制度に基づき、法律で利用者、農家が守られている。また、3分の1ずつに果樹、野菜、花を植えることが義務付けられている。ただ、東西ドイツ時代の東ドイツでは果樹や野菜が多く植えられ、現在では花壇の占める面積が増えているという。併設のコテージの中には休憩用のベッドまであった。人々は自宅からクラインガルテンに通い、園芸好きの友人と知識を交換するなど会話を楽しんでいた。こうした場所がベルリンだけでも8万カ所あるというから驚きだ。



ドイツではクラインガルテンがあちこちにあり、市民が

園芸を楽しんでいた

(25)オランダ農業の技術力に驚き

オランダは世界の農産物輸出額で米国に次ぐ2位を争う国である。国土面積は九州ほどしかなく、緯度は北海道より高いので冬は寒いし日照時間も短い。条件が悪いのになぜ世界有数の農業国になったのか。その理由を現地で確かめる機会があればと思っていたが、2003年、欧州の農業や園芸事情を視察し、その念願がかなった。

案内してくれたのは、国際的なオランダの種苗会社の一つ、エンザ社で東アジア担当のヤンパンマン氏。熊本も度々訪れ面識があった。トマトはじめ野菜や花卉[かき]の栽培農家を視察した。



オランダの施設園芸のハウスで。徹底した管理など
高い技術で支えられていたのが印象的だった

熊本県も施設園芸が盛んだが、オランダのハウスは一つが数ヘクタールの規模があり、日本とは比較にならないほど大きいことに驚いた。大型の機械類を備え、まさに植物工場だった。土を使わない養液栽培が多く、灌水[かんすい]や消毒は自動システムだった。冬季の日照不足を補う照明や肥料として作物の成長を促す二酸化炭素供給の装置、病害虫を観察するモニターなど最先端の技術が導入されていた。

EU(欧州連合)発足後、トマト産業では暖かく人件費の安いスペインとの競争に負けそうになった。しかし、高い技術力で復興し、夏季はオランダ、冬季はスペインと生産時期のすみわけが進んだという。

花卉では欧州各国だけでなく、アメリカや日本にも切り花やチューリップ、ユリなどの球根を輸出している。加えて育種が盛んで、パテント(特許)料も大きな収入源となっていた。

オランダは「生物農薬」の輸出も進めており、輸出元のコパート社も視察した。生物農薬は、作物の害虫を天敵の昆虫や害虫の病気を利用して防除したり、病原菌を抑える微生物を用いて病気を防いだりする技術である。化学農薬に比べて安全性が高く、注目が高まっている。

また、日本でも市販されているトマトの交配用のマルハナバチもオランダで商品化された。日本で使っている生物農薬やハチの多くはオランダからの輸入である。西日本でコパート社のハチ輸入の中心的な役割を果たしていたのは八代市の西岡養蜂園の西岡千年[ちとし]社長だった。オランダと熊本との縁も深い。

こうした最先端の技術力、徹底した管理システムで競争力を強化したオランダの農業は日本も参考にしたい。特に九州は、オランダより暖かく、山など涼しいところも多いなど条件はいい。農業の立て直しは可能なはずだ。

(26) 国際ツバキ協会の理事に

日本で作られ、さまざまな品種ができたツバキは世界中に愛好家がいる。研究者や生産者、愛好者が一緒になって1962年に設立した国際ツバキ協会には28カ国のツバキ協会が加盟し、会員は2千人を超える。その日本代表の理事を2015(平成27)年から務めている。

国際協会の理事就任を最初に打診されたのは40歳の頃だった。九州大の恩師で国際協会副会長だった上本俊平教授からのお話だったが、大学の仕事や研究が忙しいことなどから、十分な貢献ができそうにないと考え、固辞した。その後、再び打診され、前任で熊本出身の松本重雄氏が高齢のためついに引き受けた。



スペイン・ポンテベドラであった国際ツバキ協会の大会

時には地元放送局の取材も受けた＝2014年

理事になって最初に手掛けたのは伊豆大島(東京都大島町)の都立大島公園、大島高校など3カ所のツバキ園を国際優秀つばき園へ申請し、認定してもらうことだった。認定には200以上の品種が必要で、英語表記のラベルをつけることなどの厳しい条件がある。

大島の3園の認定前の国際優秀つばき園は14カ国39園。日本では宮崎県の「椿山森林公園」(03年)、長崎県の「五島椿森林公園」、福岡県の「久留米つばき園」「石橋文化センターつばき園」(以上10年)、大分県の「大分農業文化公園」(12年)の5園だった。

伊豆大島は言うまでもなくツバキの島で、観光資源としてもその役割は大きい。東京都が全国一のツバキ油産地なのも大島のおかげだ。それだけに国際優秀つばき園への申請では都の大島支庁長、大島町長を先頭に、高校生も含め島民が団結して活動を盛り上げ、16年2月に認定された。3園とも素晴らしく、認定条件を備えていたが、協力できたのは私の誇りである。

今は東京五輪と同じ20年に五島で開かれる、2年に一度の国際ツバキ大会開催に協力している。日本では1980年の京都を皮切りに舞鶴、宮崎、久留米と国際大会が開かれてきた。

私は国際大会の機会を生かして、熊本が誇る肥後六花について研究発表や紹介に力を入れてきた。それだけに、熊本で国際ツバキ大会を開きたいというのが前々からの私の願いだ。肥後つばき協会の会長は歴代の熊本市長が務めており、市にとっても開催意義はあると思う。熊本地震が発生し、それどころではないとも考えたが、世界中から会員が集まる大会は復興の一助になるのではなかろうか。開催を願う気持ちは再び強まっている。

(27) 三角の「花のがっこう」に協力

宇城市三角町の八代海側に浮かぶ戸馳島は県内一のランの生産地だ。そこにある「花のがっこう」は、旧三角町が島の花弁[かき]産業振興を目的に1995(平成7)年に整備した観光施設で、世界各地のランを見学できる施設や、栽培・出荷ハウスなどを備えている。

三角町と東海大は、嘉島町出身の大学創設者・松前重義先生が、終戦直後に旧制有明中学校を三角町に開設し、その後、戸馳島に不知火研修センターを開設したという縁がある。

その三角町から依頼を受けた九州東海大農学部(当時)は、1988(昭和63)年に戸田義宏先生を中心に、私も協力して「三角町の百年構想」を提案した。「花の学校」(当時)は、その中に盛り込まれていた。

当時、戸馳島は温暖な気候を利用してミカンや草花の産地として知られており、宮川政友氏が中心になって花卉農家グループ「五蘭塾」をつくり、洋ラン生産を本格化させていた。町も「戸馳花の島プロジェクト」を掲げていたため、「花の学校」はその核施設との位置付けだった。

「花の学校」完成後、研究室の学生を連れて戸馳島を訪れ、花卉生産の現場体験を続けてきたほか、生産技術の強化に向けて、バイオ技術の一種である苗の無菌培養法の普及に関するイベントを開催するなど協力してきた。

ところで、ラン産業は「リレー栽培」という複数の国、民族が関係しているのが特徴だ。具体的には、日本で選抜した品種を人件費が安く、暖房費がかからないタイなどアジアの熱帯地方の国で育成し、日本に再輸入した苗を農家が開花させ、販売している。

1980年代には、技術力のある日本で無菌培養した苗を輸出し、現地に送っていた。今ではアジアの国々でも無菌培養できるようになり、現地で育種もできるまでになっている。

私はかつてタイ、フィリピン、マレーシアなどに無菌培養の技術を教えに行った経験もあり、アジアでの栽培の実情に触れた経験がある。そこで興味深かったのは、タイで育成した苗を中国系のシンガポール人が土地の安いマレーシアで栽培するという実態だった。

働いていたのはバングラデシュやインド、タイの人々が多かった。海洋民族のマレーシアの人より、農耕民族のタイ人の方が栽培に向いているということも聞き、大変興味深かった。



「母の日」向けのコチョウランが並ぶ「花のがっこう」の出荷用

ハウス。見学も自由にできる＝2017年5月2日撮影

(28) 子どもたちに昔の暮らし体験

連載15回目で少し触れたが、豊かな自然を未来に伝える活動に取り組むボランティア団体「熊本グリーンヘルパーの会」(竹原昌宏会長)にも協力している。

この会は熊本市のNPO法人・緑のまちづくり交流協会(小池美千代代表)が、地域の緑化推進活動のリーダーを養成するために九州電力の協力を得て催した「グリーンヘルパーボランティア養成研修」の修了生を中心に、1999(平成11)年に結成された。



「波野の家」での夏休みプレイキャンプでは、昔の生活を体験してもらっている

九州東海大農学部(当時)の戸田義宏教授、九州大理学部(当時)の矢原徹一教授らと共に、ボランティア養成研修の講師を務めた関係で縁ができ、私も顧問の一人に名を連ねることになった。

研修は熊本を皮切りに沖縄を除く九州7県で開催され、グリーンヘルパーの会も各地にできた。合同で雲仙・普賢岳で植林したこともある。

熊本グリーンヘルパーの会は、自然と共生した昔の暮らしを、子どもたちに体験してもらうことにも力を入れている。設立当時、会員は60歳以上の退職者が多く、戦後に生まれ育った私たちの世代とは違った体験、技術を持っておられたからだ。

かまどでの煮炊きがいい例である。各家庭に昭和30年代ごろまで残っており、私も親の台所姿を見て育ったが、戦前生まれの方たちは自ら調理した経験があった。今はガス・電気の普及で廃れたが、水をくみ、まきを割り、火をおこすという作業をすることで、自然の恵みに感謝し、自然の循環の中で人間が生活していることを体感するのは何より必要と思った。

そのための恒例行事が夏休みに「波野の家」で昔の暮らしを1泊2日で体験する「子供プレイキャンプ」だ。会のまとめ役・園村千栄子さん(熊本市)との雑談から構想が浮かんだ。

「波野の家」とは、教え子で木之内農園会長(南阿蘇村)の木之内均君と共同購入した明治28年に造られた波野村(現・阿蘇市)の古い農家のこと。小学4～6年生を中心とした参加者には、五右衛門風呂に入り、かまどでご飯を炊き、いろりを囲んで食事をしてもらう。翌日は野菜の収穫体験、荻岳登山、地元の神楽見学など盛りだくさんだ。

先生役は猟師でもある田添利治氏(熊本市)はじめ会員が務めた。神楽や野菜収穫では地元のご協力もいただき、元村長の岩下一之信さんらとの交流が深まったのは何よりだった。

(29)「モニター農家」から刺激

東海大農学部は「モニター農家」という制度を採り入れている。他大学の農学部にはない独自の取り組みで、学部発足から間もない1983(昭和58)年に始まった。私も長年携わり、思い入れは強い。

制度の狙いは、熊本に根ざした大学として地域農業に貢献することだ。具体的には、大学と農家が一緒になって病害虫の診断や土壌成分の分析、新しい品種の育成などのほか、栽培技術や経営面の課題の解決に向けて取り組む。他学部の先生にも協力いただいたり、外部講師を招いて勉強会を開いたりすることもある。



花栽培のモニター農家(右側)を訪ねた学生ら。モニター農家は熱心で教員、学生も刺激を受ける＝熊本市西区

参加農家は約70人で、作物、園芸、畜産の3部会がある。私は長く園芸部会長を務めた。部会独自の活動以外に、作物部会長だった片野學教授、畜産部会長だった飛岡久弥教授らと協力し、3部会合同で県内にとどまらず、沖縄を除く九州7県の農家や、研究機関に足を延ばした。

農家にとっては、大学と共同で取り組むことで、最先端の研究や技術に触れる機会にもなっている。経営の厳しさや後継者難で農業の将来に悲観的になっていた方たちもおられたが、モニター農家同士の交流で刺激を受け、やる気を高める機会になったとの話も聞いた。

大学および教員にとっても、農業、農家の実情を知り、刺激を受ける貴重な機会となっているのは言うまでもない。大学は長期的な視点で基礎的な研究をすることが役割と考えられている部分もある。ただ、それだけでなく、農学部の存在意義としては農業に対する使命感も持たないといけなはずだ。

以前、ある大学で作物学の教員を採用することになり、分子生物学的な手法を用いた研究論文の多い方を選考しなくてはならないと相談を受けたことがある。しかし、論文が書けても、作物の栽培が分からない先生では、学生にとっても、その県の農業にとってもいいことではない。モニター農家制度によって「農家の顔が見える」ことで、東海大農学部は地域に根ざした研究、教育ができているといっても過言ではない。

モニター農家制度は多くの農家と仲良くなり、人の輪が広がっていくのも魅力だ。勉強会以外にも、農家の方たちに誘われ、果樹園芸学の小松春喜教授、育種学の村田達郎教授らと一緒に家族同伴で潮干狩りやホテル狩り、うたせ網漁を楽しんだことなどいい思い出だ。

(30)「園芸と文化」念願の出版

「園芸と文化」を2012(平成24)年に出版した。蔬菜花卉[そさいかき]園芸学が専門で、育種や栽培技術を研究してきたが、肥後六花に代表される日本の伝統的な園芸にも関心があり、植物と文化・歴史の関係にも注目してきた。しかし、そのような分野の研究を論文にまとめても投稿できる学会がない。そのため50歳を過ぎたら本を書こうと思っていたのだ。

念願かなった本は「江戸のガーデニングから現代まで」という副題の通り、江戸時代に盛んになった園芸についての考察を軸に、これまで見てきた世界の庭園の変遷などをまとめた。

江戸時代は絵画、芸能はじめ、さまざまな文化が発展し、園芸は将軍から庶民まで熱中した。園芸には産業と趣味という二つの側面があるが、文化としての側面は平和な時代が続いたから発達したと言えよう。

逆に言うと、幕府は平和を維持するための手段として園芸を用いた可能性があると思っている。肥後六花栽培でも明らかなように、園芸文化の担い手の一つは武士階級だった。平和のための園芸の役割に注目してほしいと願っている。

「園芸と文化」では、花卉園芸の基礎は石器時代であり、約6万年前のヒョウタン栽培にさかのぼるという自説も紹介した。大学院時代に植物調査で訪れたパプアニューギニアの石器時代の文化、客員教授として赴任したアメリカのインディアン人の原始的な土器時代の文化の中で共通する項目があることに気づいたのがヒントとなった。

パプアニューギニアとアメリカは、新大陸アメリカの発見以前には、アジア・ヨーロッパ・アフリカの旧大陸にあって隔離された地域だった。この3地域に共通する文化は、約6万年前にアフリカから世界中に広がる以前のヒトの文化だったのではないかと考えた。

共通するものには、竪穴住居、高床式住居、音楽、弓矢、船などのほか、器としてのヒョウタンの利用があった。ヒョウタンはアフリカ原産とみられる。日本では中央がくびれた形で知られるが、世界では丸いものや細長いものなど多様な品種がある。

当時、野菜や果物は移り住んだ場所にあるものを採取していたと思われる。しかし、ヒョウタンは器として便利で、それに代わるものがなかったので移り住んだ地域でも栽培したのではないかと考えている。園芸の起源についてさらに考察を深めたい。



2012年に出版した「園芸と文化」は、
文化としての園芸に焦点を当てた構成

にしたのが特徴だ

(31) 伝統園芸研究会を立ち上げ

連載初回に触れたように、2013(平成25)年に伝統園芸研究会を立ち上げ、代表を務めている。私が企画した06年の日本園芸学会のシンポジウム「江戸のガーデニング」に参加したメンバーを含む十数人からスタート。いまでは国内外の170人に増えた。

会員には今西英雄・大阪府立大名誉教授、柴田道夫・東京大教授、土井元章・京都大教授ら園芸学会の歴代会長をはじめ、大学や研究機関の研究者だけでなく、NHK「趣味の園芸」で知られる園芸文化協会の小笠原亮軒会長、江戸の園芸研究者・青木宏一郎氏らも参加している。熊本では、歴史に詳しい片岡正實・元東海大特任教授に、中国の宋や明などの園芸書探しで協力していただいた縁で参加してもらっている。



伝統園芸研究会は園芸学会に合わせて春秋2回、

小集を開いて成果を発表している

日本の園芸文化は、室町時代に独自性が強まり、江戸時代に発達、完成した。日本に自生するツバキ、ツツジ、ユリ、サクラ、オモト、ハナショウブ、カエデだけでなく、中国から渡来したボタン、キク、ウメ、アサガオなども日本で驚くような発達を遂げた。

江戸時代には園芸関係の文献も多く出され、そこに見られる花類の品種分化は驚くばかりだ。一方、「草木育種[そうもくそだてぐさ]」などの技術書では接ぎ木などの栽培技術が高度に発展していたことも読み解ける。

江戸後期に日本を訪れたイギリスの園芸研究家ロバート・フォーチュンは「日本人の国民性の著しい特色は下層階級でも皆生来の花好きであるということである」とし、「もしも花を愛する国民性が人間の文化生活の高さを証明するものであるとすれば日本の低い層の人々はイギリスの同じ階級の人々と較[くら]べるとずっと優れて見える」と記している。

伝統園芸の愛好組織は、国際ツバキ協会、日本ツバキ協会のような大きなものから、肥後六花のように地域に根ざした集まりまでさまざまあるが、多くが担い手の高齢化と後継者不足という課題を抱えている。それ故に絶滅を心配される品種も多くある。

伝統園芸研究会は、日本の園芸文化の素晴らしさを再確認し、次代につなげるのが狙いだ。そのために、品種の収集・維持や栽培技術などに関し、電子メールを利用した会員間の情報交換と、園芸学会の春秋の大会に併せた年に2回の研究発表集会を中心に活動している。会費や集会の参加費は不要なので、多くの方に参加してほしいと願っている。

(32) 教え子たちの活躍が喜び

東海大農学部の35年間で、私の研究室から約430人の卒業生が巣立っていった。教え子たちの活躍が何よりの喜びだ。

自然相手の研究は大変だ。畑を耕し種をまき、除草や農薬散布など栽培の全ての過程が対象となる。それだけに研究室の仲間同士の友情が育まれ、責任感、集中力などを含めて学生は見違えるように成長する。



3月11日の退職慰労会。全国各地から126人が集まってくれた

こうした体験は一般企業でも役に立つが、農業関連の企業や農業高校の先生など、教えたことを生かせる職業についてほしいと願ってきた。就農して頑張っている教え子も少なくない。

南阿蘇村の木之内農園会長の木之内均君もその一人だ。農学部1期生で、3年生の時、研究室に入ってきた最初の教え子でもある。

神奈川県サラリーマン家庭の出身ながら農業をしたくて入学し、「蘇陽塾」という同好会をつくって農産物を生産・販売していた。当時、農地確保の困難さなどから農業への新規参入は簡単でなかったため、南米への移民も考慮に入れて3年時にはアルゼンチンやブラジルで1年間農業研修した頑張り屋だ。

農業経営の一方で、NPO法人「阿蘇エコファーマーズセンター」の運営に携わり、たくさんの農業研修生を引き受け、約200人の就農者も育てた。さらに熊本県の教育委員長も務め、今は母校に教授として迎えられ、農業経営学を教えている。

このように学生たちは成長するし、成功の可能性を秘めている。それを考えた場合、大学の教員は研究だけでなく、教育者として学生の力を引き出す工夫をしなければならないと思ってきた。研究室で「外書講読」を重視してきたのもその一つ。重要な論文は英語で書かれているためだ。3年生からの2年間でほとんどの学生が英語の論文を読めるようになった。

英語が分かるようになれば海外に挑戦したくなるようだ。多くの卒業生が海外へ行った。研究室の7人中4人が留学や青年海外協力隊員、国際農業者交流協会の農業研修などで海外に活躍の場を求めた年もあった。アメリカのモンタナ州立大やカリフォルニア大デービス校で修士、ノースカロライナ大で博士の学位を取った卒業生もいる。

今春は65歳の定年の節目ということで、126人の教え子の諸君が3月11日に退職慰労会を開いてくれた。北海道から沖縄まで多くの卒業生と懐かしく、楽しいひとときだった。

(33) 心強い学生の「援農活動」

東海大の学生有志グループは阿蘇校舎の地元・阿蘇地域の農家を手伝う活動を2008(平成20)年に始めた。

学問として農業を学ぶだけでなく、現場を知り、農業・農村地域が抱える課題や振興について考えていこうという狙いだ。これまでも触れてきたが、東海大農学部はモニター農家制度など農家と共に歩むことを心掛けているが、学生も実践してくれて心強い。



「援農プロジェクト」でイチゴ定植作業を終えた学生たち

＝南阿蘇村、2016年9月

この試みは、「阿蘇援農コミュニティプロジェクト」が正式名称だ。学生が自由な発想で企画した活動を支援する大学の「チャレンジセンター教育プログラム」に基づく。学生に自ら考える力や仲間で集う力、課題に挑む力、物事を成し遂げる力を体得してもらおうと導入された。学生の自主性を重視しているが、専門知識を持つ教員がアドバイザーとして支援、職員・技術員を中心にしたコーディネーターが学生を指導している。

熊本では「援農プロジェクト」以外に、ここ数年ではソーラーカーレースへの参加、犬猫の譲渡会支援、子どもたちを対象にしたロボット教室開催、太陽光発電による夜桜ライトアップ、学生がガイドを務めるホテル鑑賞ツアー実施など多様な活動をしている。

私は「援農プロジェクト」にアドバイザーとして携わってきた。活動の詳細は大学ホームページなどで紹介している。15年度は春夏秋冬の季節ごとに活動。計3週間の「夏の長期援農」では多くのメンバーが産山村、南阿蘇村、阿蘇市の農家で、ハウレンソウの袋詰めやパンジーの種まき、トマトやアスパラガスの収穫、イチゴの定植といった作業に汗を流したほか、南阿蘇村であった秋の収穫イベントにも参加した。

熊本地震で阿蘇校舎は被害を受けたが、参加学生数はそれまでの約70人から160人に増え、活動の場も南阿蘇村など阿蘇地域内だけでなく熊本市内や菊陽町などにも広がっている。

学生には「大変だった分だけ農家の方の感謝の言葉が身に染みた」など、いい経験になっているようだ。一方、農家の方たちにとって学生は戦力というだけでなく、刺激になっているという。農業は作業が大変な割には収入が見合わず、後継者不足など課題も多いなか、生き生きと手伝う学生の姿は、農業へのやる気を奮い立たせるというのだ。学生、農家にとって効果のある取り組みだけに長く続いてほしいものだ。

(34) 研究の道に終わりなし

九州大の学生時代に始めた蔬菜花卉[そさいかき]園芸学という分野に関わる研究は、成果がまとまるまで時間がかかるものが多い。

博士号取得の論文は10年で2～3本しか書けなかった。長崎県平戸市のハルサザンカの古木で樹齢が約400年と推定した「凱旋[がいせん]」について、母親がサザンカと特定するのに、研究を1987(昭和62)年に始めて2005年によく論文が書けた。ただ、時間がかかっても納得できる論文しか書きたくないし、その間、わくわくしながら研究できるのが楽しみだった。



東海大阿蘇校舎で研究室の4年生8人に囲まれて

＝南阿蘇村河陽

若い頃の研究で最近になって注目されるものもある。ツバキを試験管内で接ぎ木する研究は、液体窒素を用いた超低温による品種保存に役立つとして、農業・食品産業技術総合研究機構(茨城県つくば市)の遺伝資源センターと共同研究することになった。日本や中国の大学から共同研究の申し出を受けたテーマは二十数年前のものだ。

有機農業に関する研究など始めて10年以上たっても未完のテーマも抱える。しかし、いつかは花開く日が来る。「研究の道に終わりなし」と改めて思う。

ここ数年は室内など明かりが乏しい環境でも育つ植物も探している。また、江戸時代の園芸資料の整理も懸案で、やりたいことは数多い。

研究・教育の道を歩んでこれたのは、連載で書いてきたように、多くの素晴らしい人との出会いがあったからである。その中でも強く印象に残るのは東海大創設者の松前重義先生だ。

東海大に赴任間もない85年、海洋学部がある静岡県清水市に講演に行った際、郷里・熊本から来たということで総長室に招待していただいた。ワインをごちそうになったが、グラスを傾けながら教育への情熱を語っておられたのが忘れられない。教育者としてのあるべき姿勢を教えられた。

昨年4月の熊本地震で東海大農学部の教育・研究環境は大きく変わった。阿蘇校舎は大きな被害を受け、農学部は熊本校舎で再出発した。この間、国内外の多くの友人、知人から励ましをいただき、感激している。

農学部再建はこれからが本番だ。学生、保護者、教職員、阿蘇の人々が力を合わせて築いた素晴らしい農学部が一層発展し、熊本の復興に貢献することを願って連載の締めくくりとしたい。＝終わり